

多賀城市の 歴史遺産



多賀城跡と多賀城碑

多賀城は、奈良・平安時代に陸奥国府が置かれたところで、奈良時代には鎮守府も併せ置かれました。神亀元年（724）、大野東人によって創建され、11世紀の中頃に終焉を迎えるまで、古代東北地方の政治・軍事の中心地としての役割を果たしました。

大正11年多賀城廃寺跡とともに「多賀城跡附寺跡」として国の史跡に指定され、昭和41年には特別史跡に昇格しています。その後、館前遺跡、多賀城南面地域、柏木遺跡、山王遺跡千刈田地区が追加指定されています。



◆多賀城跡

多賀城跡は、約900m四方で、周囲は築地塀で囲まれ、南・東・西に門が開いていました。ほぼ中央には、儀式や重要な政務を行う政庁があり、第I期から第IV期までの4時期の変遷があります。さらに、城内の城前・作貫・大畑・六月坂・金堀・五万崎の各地区には実務を行う役所や工房、兵士の宿舎などが置かれていました。



◆多賀城廃寺跡

多賀城と同時期に創建された多賀城の付属寺院跡で、多賀城跡の南東約1.2kmの高崎地区にあります。東に塔、西に金堂が向かい合っており、その北には講堂が置かれ、中門から延びた築地塀が塔と金堂を取り囲み講堂に取り付くという伽藍配置は、大宰府の付属寺院観世音寺と共通しています。寺の名称は伝わっていませんが、山王遺跡から「観音寺」と書かれた土器が発見されており、寺名の可能性が高いと考えています。

◆多賀城碑

平城京などから多賀城までの距離、多賀城の創建や修造について刻まれた多賀城修造記念碑で、天平宝字6年(762)12月1日に建立されました。高さ248cm、最大幅103cmで花崗岩質砂岩という非常に硬い石材が用いられています。多賀城南門跡近く、ほぼ真西を向き、下部が約50cm埋められた状態で垂直に立っています。江戸時代の初めに発見されたといわれ、すぐに歌枕「壺碑」の名で呼ばれたことから有名になりました。多賀城と古代東北の解明にとって重要な歴史資料として、平成10年6月30日、国の重要文化財に指定されました。



多賀城の歌枕

歌枕とは、歌に詠み込まれて有名になった歌名所のことであり、多賀城内には、平安時代以来の歌枕が数多くあります。これは江戸時代、仙台藩4代藩主伊達綱村が、領内の名所旧跡を

調査し、古来からの歌枕を整備保護した結果とされています。その際に早くからこの地の歌枕として定着していた「末の松山」を核として整備がなされました。



◆野田の玉川

塩竈市大日向を源にして、砂押川に注ぐ小川で、六玉川の一つに数えられています。能因法師の歌にちなみ、江戸時代、仙台藩によって整備されました。



◆おもわくの橋

野田の玉川にかかる橋で、西行の歌にちなみ、江戸時代、仙台藩によって整備されました。前九年の役で有名な安倍貞任が女性のもとに通うため渡ったことから「安倍待橋(あべのまちはし)」とも呼ばれています。

ゆふされば しば風こして みるくの
のだの至河 千鳥なくなり
能因法師 (新古今和歌集)

ふままうき もみぢのにしき かりしきて
人もかよわぬ おもはくのばし
西行 (山家集)



◆浮島

末の松山などと並ぶ有名な歌枕の一つで、多くの歌に詠みこまれたのは勿論、屏風絵の題材としても名高いものでした。

しほがまの 前に浮きたる 浮島の
浮きて思ひの あるせなりけり
山口女王 (新古今和歌集)

むつのくの おくゆかしくぞ おもほゆる
つほのいしふみ そとのほまかせ
西行 (山家集)



◆つぼのいしづみ

平安時代の終わりころから登場する歌枕で、西行や源頼朝の和歌で知られています。江戸時代初め、多賀城碑が発見されるとすぐ「壺碑」の名で呼ばれ、松尾芭蕉は碑と対面した感動を紀行文「おくのほそ道」に書き残しています。

君が代は 千びきの石と くだきつ、
よろづせごに とれどつきせし
源頭仲 (堀河院百首園書)



◆志引石

安永風土記には、名石「千引石」として記載されています。ここには、誰もが動かせなかった千引石を、若い女性が動かしたという伝説が残っています。



わが袖は 汐子に見えぬ 沖の石の
人こそ知らぬ 乾くまわなし
二条院講岐 (小倉百人一首)

おきのみて 身をやくよりも 悲しきは
宮こしまべの わかれなりけり
小野小町 (古今和歌集)

◆沖の井(沖の石) (市指定文化財)

末の松山の南、住宅地に囲まれた一画にあり、池とその中の大きな石が目をはびます。江戸時代には、仙台藩により「奥井守」が置かれて大切に保護され、現在も地元の人々がその伝統を引き継ぎ、守り続けています。



◆末の松山 (市指定文化財)

宝国寺の裏手、2本の松がそびえる丘が末の松山です。最古の勅撰和歌集である古今和歌集(延喜5=905年成立)に初めて登場し、以後みちのくを代表する歌枕として、多くの歌に詠まれました。

らざりきな かたみにそぞと しばりつつ
すゑのまつ山 なみこそじとは
清原元輔 (後拾遺和歌集)

◆貴船神社

海上安全の神として漁民の信仰を受け、数々の木船の模型が献納されています。江戸時代には白山社と呼ばれていました。



◆多賀神社

滋賀県にある多賀神社の分霊を勧請したと伝えられています。延命長寿の神で、年の数だけ竹の籬をおさめて祈願するのがならわしです。



◆陸奥総社宮

陸奥国百社を合祀する神社。江戸時代には、鹽竈神社の14末社の一つで、鹽竈神社参詣に先立って、まずこの総社宮に詣でなければ、神の加護が受けられないとされていました。

◆高低几号(きごう)標

明治9・10年(1876・7)に内務省地理局が実施した東京一塩竈間の高低測量(現在の水準測量)の際、標高を示すものとして刻まれたものが市川の塩竈街道沿いに残されています。ここで確認できるものは、標高50mの成果が与えられています。



◆多賀城神社

昭和27年(1952)に建立された市内で最も新しい神社です。南北朝時代、陸奥太守として多賀国府に赴任した義良親王(のちの後村上天皇)、北畠親房・顕家父子を祀っています。社殿は、第2次世界大戦時の多賀城海軍工廠(こうしょう)奉安殿を移築したものであり、海軍工廠の数少ない遺構としても貴重です。

◆つぼのいしぶみ道標

享保14年(1729)、奈良の墨専門店古梅園の当主松井和泉掾元泰をはじめ頓宮仲左衛門、越後屋喜三郎によって建てられました。壺碑までの距離や道を記しており、元は市川橋のたもとにありました。

◆奏社宮道道標

明治17・8年(1884・5)頃塩竈新道がつくられたことから、奏社宮への案内表示として大正13年(1924)に建てられたものです。末の松山や鹽竈神社などへの距離も東西南北ごとに刻まれています。



塩竈街道

塩竈街道は、江戸時代、仙台芭蕉の辻から塩竈に至る街道であり、奥州一宮鹽竈神社へ参詣する道として多くの人々に利用されました。街道沿いには奏社宮（現陸奥総社宮）があり、鹽竈神社に参詣する際には、先に奏社宮を詣でるのが通例であったとされています。この街道は、松島へ向かう街道でもあったことから、松尾芭蕉をはじめ多くの文人・墨客が往来しました。南宮から市川にかけては、現在もこの街道沿いに形成されたまち並みが残されており、往時の面影をしのぶことができます。



◆南宮神社

江戸時代、鹽竈神社14末社の一つに数えられていた神社で、天曆年中(947~956)に美濃国不破郡に鎮座する南宮神社の分霊を勧請したと言われています。紫明神、色の御前などとも呼ばれていました。

南宮神社

◆伏石

弘安10年(1287)に建立された市内で2番目に古い供養碑で、西阿弥陀仏という僧を中心に、30人余りが力を合わせて碑を建てたことが刻まれています。名前の由来については、伏せてあったこの碑を立て起こしたところ、市川に疫病が流行し、再び伏せたので伏石と呼んだとも、仙台藩主の鹽竈神社参詣の道筋にあたり、立っていた石を藩主に遠慮して伏せておいたからとも言われています。



◆庚申神社

4基の庚申塔を祀る神社です。その中の明暦4年(1658)の庚申塔は、市内で最も古いものであり、県内における庚申信仰の普及を示すものです。この神社のある南宮地区では年に1回、庚申様を清めた後、五穀豊穡と家内安全を祈る庚申講が現在でも行われます。

八幡のまちなみ

八幡(やわた)の地名は、かつて末の松山の西方にあったという八幡神社に由来します。江戸時代、元出羽国天童城主であった天童氏が伊達氏の家臣として八幡村を与えられ、江戸時代を通して治めていました。同家に伝わる絵図

によれば、天童氏の屋敷を中心として、周囲に家臣団を配したまち並みが作られていました。このまち並みの地割りや道路は、現在でも変わらず残っているところがあり、江戸時代の面影を伝えています。



道路右手に不磷寺、宝国寺が並ぶ八幡のまち



宮城郡八幡邑天童氏屋敷ならびに家中・足軽屋敷絵図



◆多賀城鹿踊

かつて中谷地鹿踊と呼ばれ、旧八幡村中谷地地区の萩原神社に、五穀豊穡を祈願して、奉納した踊りです。地元多賀城はもとより、明治26年(1893)には遠く金華山の黄金山神社にも踊りを奉納しており、八幡神社の境内には、その時の記念碑が立てられています。現在、一度廃れた踊りが多賀城鹿踊として再興され、保存会の人々によってその伝統が守り続けられています。



◆宝国寺

末の松山のふもとにある臨済宗の寺で、山号は末松山です。はじめは林松寺と称していましたが、領主となった天童頼澄の法名から宝国寺と寺名を改め、天童氏代々の菩提寺となりました。



◆喜太郎稲荷神社

領主天童氏の守護神として崇敬されている神社です。天童氏が出羽国にいた頃、足軽の喜太郎が京都伏見稲荷に参拝して神力を得、守護神となったということであり、天童氏が最上氏との戦いに敗れ、関山峠を越えて逃れた時、喜太郎稲荷に祈ると、道案内をして助けたという言い伝えが残っています。



◆沖地藏

昭和17年、多賀城海軍工廠(こうしょう)の建設に伴い、沖区(現在の桜木地区)からこの地に強制移転させられた人々が祀ってきた3体の地藏尊です。その中の、中谷地から移された地藏尊は、昭和4年頃、地元の念仏講の人々によって建てられたもので、その際、久しく途絶えていた中谷地鹿踊を復活させて、奉納したとのこと。



◆八幡橋袂碑群

八幡橋の南にある11基の供養碑で、その中の寛永4年(1664)の碑には「南無阿弥陀仏」と念仏が刻まれ、近世の年号をもつ念仏碑としては、本市で最古のものです。



◆天童家墓所

喜太郎稲荷神社の北側にある墓所で、初代の八幡の領主である天童頼澄を初め、歴代当主やその夫人の墓が並んでいます。



◆居家前碑群

国道45号との交差点付近に、寛政4年(1792)の庚申碑をはじめ、嘉永元年(1848)の湯殿山碑など、6基の石碑が並んでいます。碑の前の道は、現在は所々分断されていますが、八幡のまちから八幡神社の前面に通じる道であり、八幡神社周辺に残る細い道に、かつての面影をうかがうことができます。



◆八幡神社

延暦年中(782~805)、坂上田村麻呂が勧請したと伝えられています。元は、末の松山のある丘陵上にあり、八幡氏がその地に拠点をおいたことから、現在の場所に遷宮したと伝えられています。源頼家・義家父子が、戦勝祈願にゆがけを奉納したことから、ゆがけ八幡、または興(おき)八幡などとも呼ばれていました。

◆貞山運河

貞山運河とは、阿武隈川から塩竈湾に至る全長31.5kmの日本一長い運河です。その北の東名運河、北上運河を含めると総延長は46.4kmにも及びます。名称については、明治時代に発案者である藩祖伊達政宗の偉業を讃えるため、その法名「瑞巖寺殿貞山禅利大居士」にちなんで「貞山堀」と命名され、その後、運河取締規則の中で、現在の「貞山運河」になりました。多賀城市域を通る蒲生―塩竈湾間は「御舟入堀」「舟入堀」と呼ばれ、万治年間(1658～1660)までに塩竈湾―大代間、次いで寛文10～13年(1670～1673)に大代―蒲生間と順を追って造られました。この御舟入堀の完成により、藩領北部から仙台北下へは、陸送することなく物資輸送を行なうことが可能になりました。しかし、このことは塩竈を素通りして物資が輸送され、塩竈の衰退を招いたことから、貞享2年(1685)、伊達綱村は「藩米以外の荷物や魚介類、材木を積んだ船はすべて塩竈港に着岸すること」という特令を出して塩竈の町を保護したため、以後、御舟入堀は明治になるまで米中心の輸送路として機能しました。明治になると、野蒜築港事業が始められ、野蒜への輸送路として貞山運河の全面的な改修が行われます。その後、輸送手段が鉄道などに変わっても、穀類・木材・魚類・石類・肥料・雑貨物などの輸送に利用され、今日でも漁船や釣り船の航路として利用されています。



◆加瀬沼堰堤と加瀬沼橋

加瀬沼は、江戸時代の初め、八幡村の領主天童氏が造成した人工のため池です。もともと小さな沼であったものを、水量を豊富にするため堤を築き、市川・八幡・浮島・田中・加瀬村の水田を潤す用水池にしたといわれています。また、昭和の初めには、塩竈の水道水供給のための水源としても利用されており、現在でも、堰堤・取水塔などにその名残をとどめています。



◆玉川橋梁

玉川橋梁は、野田の玉川にかかけられていた旧塩釜線の鉄道橋梁で、レンガ積みの橋台や土留めが良好な状態で残っています。この橋梁の造られた年代については、外観や形状から明治20年(1887)に日本鉄道奥州線が開業した当時のものと推定されており、県内最古の鉄道遺構の可能性が指摘されています。



◆南安楽寺古碑群(市指定文化財)

七北田川左岸の堤防沿いにあった中世・近世の供養碑を一ヶ所に集めたもので、おかねだから碑群とも呼ばれています。その中には、鎌倉時代後半のものなど8基の板碑(供養碑)があり、最も古い碑には正応3年(1290)の銘が刻まれています。

◆弘安の碑(市指定文化財)

現在確認される市内最古の中世の板碑(供養碑)です。碑面上部中央に釈迦如来を、左端に鬼子母神を示す梵字(古代インドの文字)が刻まれています。その下には、法華経を守護する神々と、建立した弘安7年(1284)の年号が刻まれています。

